

信 毎 歌 壇

小島 なお選

アスファルト、草、土、木の根、アスファルト見えた桜を指して歩く (松本市) 美甘 歎
夜もすがら添ひ合つてゐる学生の磯着とクマノミめきぬ (小諸市) 加藤 陽介
春暖に融けし雪より現れぬ庄ざれしがたの浦公英口ゼット (須坂市) 東島 雄二
寄りそつてゐる怪獣のぬいぐるみ人は寄りそわなければ減る (佐久市) 水間喜美子
空の藍山の碧を目にためて仔大来たり山の村がわが肩に電線の雪がぼつと落つかわいい春がやってきました (上田市) 小林さよ子
叩かれる馬かわいそう鶴馬観る十七歳のやさしき横顔 (東御市) 大崎きよこ
パーマの目を唇に記せば四歳が見付け残らず丸を付けたら (山形市) 上條ひろ子
午後三時カップラーメン手に煙草カラオケ店の青年の昼 (松本市) 成沢 伶乃
冬越して小屋から出せる豆トラは弥生の陽浴びエニンジン吹ゆる (南木曾町) 堀 進

娘は昔「春の匂いがある」と言い春の匂いは吾も感じる (大町市) 小西 美恵
スリッパで歩くような音少し聞こえただけのベネギン散歩 (東御市) 広沢里枝子

第一首、アスファルトの割れ目にも春が。桜をたどる視界から、踏みしめる足裏の感触までが弾みながら伝わる。第二首、学校でもSNSでも共に過ごす学生たち。共生と依存のはざまの繊細な心を

危ぶむ。第三首、もともと平たいのに、雪に圧されていっそう扁平に。のどかなロゼットが春を呼ぶ。第四首、アニメでは敵である怪獣。けれど、敵対するばかりでは人間はやがて滅んでしまう。

米川 千嘉子選

乗り換えの階段一気に駆け上がるまたまた会いに行けるよ母よ (松本市) 川村 聡子
兎狸狐猪は今朝何食みしや休みなく雪降り積もる山に暮らして (駒ヶ根市) 堀沢 春子
月影にいつか帰れし古羅の笑みに五色のあられ囁み締む (東御市) 渡辺美保子
手の届く物干し竿に手をそえて横歩きを往復する日常となる (千曲市) 荒井よし子
わいわいと表を通る年長さんお離さま見に武家屋敷へと (長野市) 島田 伶子
妻の手の結婚指輪は苦節へて求めたものと子等は知らざり (長野市) 丸山 祐司
いくたびも深呼吸する樹の息吹深く吸っては早緑になる (茅野市) 鶴野奈緒子
難さの絵柄の餅を買って来て八十六歳の春を言祝ぐ (長野市) せきたつお
廃校の河津桜が九分咲きと雪作務のわれに写メルとぞく (飯山市) 市村紀久子
雨上がり夕空映える廃校舎まるで母校は世界遺産 (伊那市) 赤羽 正彦

きつといまじゆうにそらをまわつてねつばくろうありがとうやすらかに (東御市) 吉沢 好樹
病氣して実家に戻りし母のお粥の味は生涯忘れず (長和町) 羽毛田 栄

第一首、遠く住む母のもとへ急ぐ気持ちと急ぐ元気。明るく頼もしい。第二首、よく見かける里山の獣たち。厳しい冬を生きしのぐ仲間でもある。第三首、古い雛をいつのまにか月に帰った二人の形見

のように感じるのだろうか。詩的でなかなかリアルでもある。第四首、最近では室内にもおけるいろいろな物干しがある。そういう物も利用して健康維持に励むわが姿を淡々とユーモラスに。

小池 光選

失明に鏡と別れ三十三年老いゆくわれの顔を見ぬまま (千曲市) 上原 博司
おやすみと二声かけて床に入る亡き娘の写真に吾は守られて (長和町) 羽毛田 栄
「お掃除はいいからゆくり話しよ」おやすみくつて母は待ち居し (小布施町) 市村志津枝
いつくにて逝くか知らねとひっそりと鳥も獣もこの世去り行く (飯綱町) 坂井 寿男
シルバーカー押してゆくり病院へ春草匂ふ道を楽しむ (長野市) 小白向栄子
チュビチビと小鳥の音が聞こえる今年の春が今日始まりぬ (茅野市) 三好 碧
入学の祝ひのスーツでらてらと朝日をまどふ無人駅なり (小諸市) 加藤 陽介
バドミントン母子四人がたのしそわが家にたつてあつたあの声 (長野市) せきたつお
「カンパネラ」眠れぬ夜に猫と聴くよくよする今日の失敗 (東御市) 関 啓
太古の人も仰いだ星のひかり澄むとにかく手術が終つてよかった (長野市) 近藤 光子

給食の集金袋を配はられて親に渡すを躊躇せし頃 (上田市) 宮崎 拓男
和田秀樹精神科医の本を読み惚けなら怖くはないと思いつ (松本市) 降旗 悦二

第一首、視力を失って三十三年、立派に生きて来られた。老境となって、その自身の顔が見られぬことを嘆く。まことに厳粛な歌である。第二首、この世にわが子に先立たれるより悲しいことはない

だろう。遺影を飾り、毎夜おやすみの声をかける。その声は必ず亡き子に届いていることだろう。第三首、ときどき娘がやってくる。お掃除より話がしたい。声を聞きたい。いい子供を持って幸せだ。